

# 大分の伝統文化・山車

## 山車の歴史

大分市内の山車の歴史は古く、大友宗麟の活躍した頃、祇園宮（上野の弥栄神社）の夏の祭礼では、山車が曳かれていました。祇園宮の山車の巡行は江戸時代を通して続いていましたが、徐々に衰退し明治初頭にはなくなりました。一方で江戸の終わり頃から、大分市内の東部地域では山車の祭礼が活発化していき、多くの山車が登場するようになりました。



高松神社夏季大祭・高松の山車



## 市内の山車の特徴

市内では山車のことをヤマと呼んでいます。担ぐものをカツギヤマ、曳くものをヒキヤマと呼び、ヒキヤマには、おもに人形ヤマと太鼓ヤマがあります。人形ヤマの人形は三佐の人形師によるもので、歌舞伎の演目などを模したものが飾られます。優美で艶かしさのある人形は、見る人の目を奪います。太鼓ヤマで演奏されるお囃子は、巡行中に演奏するものを渡り拍子と呼び、地域ごとにその曲調は異なります。使われる楽器は太鼓、鉦、笛が主で、地域によっては三味線が入るなど、特徴的なところもあります。

本来は、山車の形は地域ごとに異なっていたようですが、現在は格子模様の屋根に絢爛な装飾を施した山車が主流です。

## 特徴的な山車・野津原清正公祭



8月の23、24日に行なわれる清正公祭では、オオヤマと呼ばれる巨大な山車が登場します。市内他地域の山車とは大きく異なり、山車の中で演劇を行うことができる巨大なものです。この形状は豊前系統の山車の流れを汲んでおり、大分市内では現在、唯一ここでしか見ることができません。

## 特徴的な山車 劔八幡社例大祭



現在4月の第一日曜日に行われる劔八幡社の例大祭（春季大祭）では、古い姿を残した特徴的なカツギヤマが登場します。喧嘩祭りとしても有名で、ヤマ同士が激しくぶつかり合います。形状は多少変化していますが、独特の古い姿を残した山車は、現在ではあまり見ることができない貴重なものです。